

前川滋郎さん

帝人の副社長を経て帝人精機の社長をつとめられ、帝人ご在職中昭和三十年代初め、米国駐在を命ぜられ、当時米国での活動には商社員の資格が必要(有利)だったので日商社員となり五年間在米経験がある。だから日商岩井とはインテンショナルでない縁ということになる。奥様は鈴木治雄会長のご令妹。

お二人の若々しいお元気な自己紹介のお話のあと荒木正雄支部長のご挨拶、続いて池田宗吉さんのご発声で乾杯をして宴に入りました。ビール、お酒を酌み交わしながら壺中庵自慢の日本料理、見事な盛り付けに箸を運びながら博識博学の武岡、前川両長老論客を迎えて戦時中の従軍談、戦争体験やら経済金融、社会情勢などいろいろな話題が途切れることなく、それは賑やかに盛り上がり、あっという間に予定の二時、荒木幹事からこれからも皆さんお元気で例会に参加されますようと閉会の言

葉でお開きとなり、皆さん銘菓

「壺中庵吉珠最中」のお土産を手にして再会を約して解散しました。

庭園は樹種にもよるのか紅葉の気配は見られず人影も少なく静かで緑一色、小径の傍らに赤松、黒松、蝦夷松等の見事な盆栽鉢植えが二十鉢位並べられている。鉢に添えられた札には樹齢八十年から中には五百年と記されているものも数鉢見られる。どんな人が育て始めたのかと思いを馳せる。細い径をおり池のほとりをゆつくり歩きながら暫し庭園散策を楽しんで帰路につきました。(N)



して、大変きれいなお花をご恵送賜り誠に有難うございました。

本人は年齢から来る衰えはございますが、体調には問題なく元気にしておりますので、会員の皆様によりしくお伝えいただければ幸いに存じます。

略儀ながら、書中をもってお礼申し上げます。
平成十四年二月

謹啓 薫風の候 貴台におかれましては益々ご健勝のこととお喜び申し上げます
さて この度の故 拓山壽郎儀告別式並びに偲ぶ会に際しましては 丁重なるご甲慰を靈前に賜りまして衷心より感謝申し上げますと共に生前のご厚誼を深謝申し上げます

お蔭様をもちまして 告別式並びに偲ぶ会はつつが無く執り行うことができましたことを 重ねて御礼申し上げます
本来であれば お伺いし御礼申しあげべく処でございますが

辰巳会 会員だより

小野 晶子

次は来月七日の金曜日ね 森さんのご逝去のお知らせを受け、ほんとうにびっくりして言葉も出ませんでした。あんなにお元気だったのに!

五月二十二日、神戸ポートピアホテルにて全国大会が開催され、受付を共にお手伝い致しました。皆さんと楽しそうにお話なさったり、色々とお心配り等なさっておられました。

会も盛会で無事に終り、「お疲れ様でした。次は来月七日金曜日ね」と、確め合ってお別れした許りでした。これが永久のお別れになろうとは、誰が予測致ししよう。

六月七日の幹事会、何時も二人並んでいますのに、今日はおられません。でも、「お早うございます。」と、お元気なお声が聞こえて来るような気がして、心にポツ

カリ穴が開いたようで淋しくな

りません。当日は、庭の紫陽花の花を切り、アルバムの中からお優しくほ笑んでおられるお写真を切り抜き、小さな額縁に入れてお席に飾り、ご冥福をお祈り致しました。幹事をご一緒に仰せつかって十有余年。言葉では言い尽くせぬ程、お世話様になり、お導き頂きました心より感謝致します。

辰巳会をこよなく愛され、ご家族思いの方でした。おしゃれで明るく、ユーモアたっぷり、一緒にいると、心温まる思いが致しました。クリスマスチャンでいらした森さんは、神と人に愛され、世の為、人の為にご奉仕され、天国の幸いに預けられました。魂の平安とご遺族様の上に、神様のお恵みとお守りが豊かにありますように心からお祈り申し上げます。

柘山 寿郎

謹啓 春寒の候、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。
さて、この度は寿郎長寿祝いと

略儀ながら書中を以って御礼の御挨拶を申し上げます 敬具
平成十四年五月

故拓山壽郎儀告別式
偲ぶ会葬儀委員長

会頭 宇山忠男
喪主 拓山和昭

辰巳会会長
鈴木 治雄様

藤野 欽司

「たつみ」編集部御中
今年の夏はいつまでも暑く参りました。それでも、私たちが勤めている時代と違って今の若い人は大変だろうと、ボランティアに精を出しております。

私の父は加古郡野添の庄屋の出身で、よくある親戚への連帯保証から没落し、一家離散の運命に会い長男として本家再興のため必死の努力をしたことが遺された履歴書からも読み取れます。三年間の神戸市書記から二十二才で横浜の神栄(株)に就職、さらに七年間勤めその間給与、賞与も順調に昇給し

ているにも拘わらず三十才で、神栄の初任給で鈴木商店に変わっています。この間に何があったのでしょうか、今となっては知る由もありませんが、推測では当時、神栄は生糸の輸出市場を神戸にも開設したいという意図から設立されたのですが、糸価の激しい変動から浮沈を繰り返し、結果的には生糸業務は横浜を中心として順調に伸びていたのです(神栄百年史より)。しかし、その年十月、父は

母を失い失意のうちに退職して故郷に帰りましたが、そこで鈴木商店本店役員の日野誠義の知遇を得たのではないのでしょうか。
ここから何が読み取れるのでしょうか。青年の本家再興への努力は母を失ったことにより一旦挫折しましたが、そこに給与は安くとも将来を託せる前途ある鈴木商店が現れたのではないのでしょうか、さらに、これを結び付けた人との繋がりがあったのではないかと思えます。鈴木商店入社後は父の暮らしは順調に推移し、兄弟で故郷に父

母の墓を建立し文字通り故郷に錦を飾ることができました。一枚の下書きの履歴書は多くの事柄を語っているようです。

*父は鈴木商店倒産後は帝国炭業の業務を譲り受け、戦時中の企業統合を期に廃業しましたが、戦後は友人と「富士石炭」を再興したものの失意のうちに八十二才で亡くなりました。没後この履歴書にある大正二年から倒産までの事情が不明で、昭和六十二年「辰巳会」があるのを知り、松下重男様のお手を煩わし昭和式年表発行の住所録で在籍は判明したものの、当時の在籍者の方に連絡を取って頂きましたが、残念ながら時すでに遅く詳細は不明でした。最後に辰巳会の会員の皆様のご自愛をお祈り致します。

平成十四年九月十二日